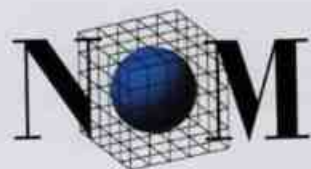


新潟県近代美術館便り

# 雪 椿 通 信



第17号

2001.9

日本画の三人

# 大矢 紀・三輪晃久・山崎隆夫展

～みずみずしい生命の息吹～

9月15日(土)～10月28日(日)

煙を吐きながら金色に輝く夜明けの火山、深い緑の中にひっそりと静まりかえる青い沼、秋の風に揺れるコスモス畑と空高く浮かぶ鱗雲。金属の箔による光の輝きと、岩絵具のもつ美しい色彩と質感。本展覧会では、日本画の可能性を追求しながら、独自の表現を続けている新潟県ゆかりの三人の画家をご紹介します。

大矢紀は昭和11年(1936)三島郡与板町の生まれ、父は日本画家の大矢黄鶴です。昭和30年(1955)再興第40回院展に《石神井川》が初入選し、前田青邨に師事しました。古代から続く手つかずの自然の営み、あるいは海岸に打ち捨てられた廃船といった時の流れを感じさせるモチーフを描き、豪快さと繊細な装飾性という相反するふたつの要素を調和させた作品を生み出しています。

三輪晃久は昭和9年(1934)京都市生まれ。祖父は洋画家三輪大二郎、父は日本画家三輪晃勢で、ともに与板町の出身です。昭和32年(1957)第13回日展に《はばたき》が初入選。昭和33年(1958)京都市立美術大学を卒業し、堂本印象に師事しました。穏やかな風景画であり

ながらも、そこには目に見えない大気の流れや地表の温もりをも表現しようという試みを見てとることができます。

山崎隆夫は昭和15年(1940)、新潟市に生まれました。昭和40年(1965)第8回日展に《造船所》が初入選、昭和42年(1967)京都教育大学特修美術日本画専攻科を卒業しました。絵具の層が幾重にも重なり、画面がヴェールで覆われたかのような独特の質感によって、身近な植物や小さな生物の営みが幻想的な作品となって私達の前に現れます。

三者三様の試み続ける画家たちの展覧会出品作を中心に、各作家約25点を選びました。それぞれの歩んできた道のりを見渡すとともに、現代日本画の魅力をじっくりとお楽しみください。また、長い歴史をもつ「日本画」が、これからどのような方向へ進んでいくのかを探るきっかけにもなればと思います。

(美術学芸員 小西珠緒)

## 有元利夫展

～花降る時の彼方に～

2002年2月16日(土)～3月24日(日)

有元利夫は1978年に「花降る日」で、安井賞初の特賞を受賞します。若くしてその才能を開花させ彗星のごとく現れた有元でしたが、1985年38歳の若さで突然この世を去ってしまいます。この間、絵画作品から版画や立体へもその制作の幅を広げていきました。一方で有元は自身の作品の成り立ちについて多くの言葉を残しています。画面に登場する人物が、ほとんどの場合一人であること、空中にいろんなものが浮かんでいること、作品が長い年月を経たかのような古びた感じに表現されていること、画面の中に舞台が設定されていること等々について様々なエピソードも交えながら解説しています。

ここでは、なぜ画面を古びた感じにするかという点について見ていくことにしましょう。「何であれ、出来立てのホヤホヤというのはどうも苦手です。床屋も行きたくは照れくさいし、服もおろしたてだと何となく馴染めない。ひと言で言えば、風化したものの方が好きなのです」と言う有元は次のように続けます。

「風化というのはとりもなおさずものが時間に覆われることだと思う。時間に覆われることによって、そのものの在り方は余計強くなる」と。(「有元利夫 女神たち」1981)

これは単に経年変化に対する共感というだけではなく、絵画作品にもものとしての存在感を加えていくことで、作品の新たな広がりを求める有元の考えが表れているのではないのでしょうか。

有元の「風化」へのこだわりは小学生の頃の模型飛行機作りにもさかのぼることができます。さらに、浪人時代に目を開かされた東洋の仏像や仏画、大学生の時にイタリアで出会ったプレスコ画の影響も大きかったと述べています。「風化」は有元作品を特徴づけるものであるとともに、絵の具そのものや絵肌へと見る者の関心を引きつける要素にもなっています。

ところで、有元は制作で余った絵の具を「捨て絵の具」と称し、キャンバスに塗りつけておき、そこから「お呼び」がかかるのを待って、イメージを広げ描いていくという方法をとっていました。この手法は制作のきっかけを有元に与えていたと同時に「風化」にとっても、必要な過程だったといえるでしょう。

ワイヤ・ブラシでキャンバスの表面をこすり、「古さ」を演出した有元、それは私たちの意識を作品の表面に留めておくための装置だったとも言えます。そして、そこでは制作のきっかけを提供した「捨て絵の具」もまた、

◆会期中、講演会を予定しています。

「現代日本画とその魅力」

草薙奈津子氏(美術評論家)/10月6日(土)午後2時より(予定)  
現代の日本画をめぐる状況とその問題点、今後の展望などをお話しいたします。ふるってご参加ください。  
(当館講堂にて/申し込み不要・先着180名・入場無料)



大矢紀《胎動桜樹》  
1986年 個人蔵



山崎隆夫《コスモス花の咲く》1995年 作者蔵



三輪寛久《天宇》1994年 作者蔵

生き生きと「風化」のための役割を演じているのです。  
展覧会は絵画、素描、版画、立体など約130点で構成  
されます。(学芸課長代理 中嶋 均)



有元利夫《花鳥の日》1977年



有元利夫《こもり》1975年



有元利夫  
《ささやかな時間》  
1980年

# 新潟の美術2002 近代美術館セレクト3 県民会館ギャラリー(新潟市)にて 詩人・堀口大學と美の世界

2002年2月27日(水)～3月19日(火)

大正・昭和詩壇を代表する詩人、堀口大學。彼は父親が外交官であった関係で青年時代の大半を外国で過ごし、マリー・ローランサンやジャン・コクトーと直接親交があったことで知られています。自ら絵筆をとることは殆どなかったものの、詩人の心は国境を越えてジャンルを異にするフランスの芸術家たちと深くつながっていました。

一方、大學は父祖の郷里新潟との縁が深く、多感な少年期を長岡で育ちますが、戦時下から戦後にかけて妙高と高田へ疎開したことによって越後の文化サークルに招き入れられ、一時期その一翼を担うに至りました。小田嶽夫が中心となって終戦の翌年に創刊した雑誌「文藝冊子」を編くと、当時大學が身をおいていた高田周辺の芸術的雰囲気がよくわかります。この小冊子には文筆家のみならず写真家濱谷浩、画家倉石隆、版画家川上澄生らが文章を寄せており、堀口大學の詩や短歌も創刊号をはじめとして折りにふれて掲載されています。

そして、現在新潟県立近代美術館が所蔵している濱谷浩による堀口大學を被写体とした写真は、丁度その頃撮影されたものです。濱谷は妙高まで大學を幾度も訪ね、詩人の表情を撮るのに苦勞を重ねました。「堀口大學

さんはこの五月末、まだ炬燵のある頃に第一回訪問をして夏、秋と訪ねてい乍ら未だによいものが写せずにいます。室内では中々に骨が折れ、詩人の神経とカメラの神経がいつも喧嘩つてしまふのです。(中略)外景はコブシの大樹などあつて詩人の背景には絶好の装置であり乍ら、これ又この地方の

天気の良いのに北國のま・ならぬ経験をなめています。」「(「文藝冊子」第九号) そうして撮影に成功したのがおそらくこの一葉でしょう。撮影後、大學は「われは一さいを失つてわづかに一二の詩を得たる者／空しくも尊き哉やわが詩 堀口大學」と濱谷浩の撮影台帳に記したといひます。

今回の展覧会では堀口大學という詩人の生涯を軸にして、フランスと日本そして新潟における様々な芸術家たちのゆたかな交流の一端を明らかにしてみたいと思ひます。(主任学芸員 平石昌子)



濱谷 浩(写真家)より「堀口大學、詩人、新潟県妙高山麓」1946年



サン・テグジュペリ著「夜間飛行」(堀口大學訳)第一書簡 初版 1934年(編集権が19歳でデザイナーとして初めて請け負った装幀の仕事がこの小説でした)

拡大常設展(企画展示室にて 観覧料:常設展料金に含む)

## 齋藤三郎と新潟の工芸

11月3日(土)～12月24日(月)

昨年度、県出身の陶芸家齋藤三郎の遺族より60点の寄贈を受けました。齋藤三郎は、大正2年栃尾町(現栃尾市)に生まれ、若くして近藤悠三、富本憲吉の二人の人間国宝から陶芸を学んだ後、独立して作陶を始めましたが間もなく出征。復員後兄を頼って越後高田(現上越市)に窯を築き、昭和56年に68歳で亡くなるまで白磁、色絵、染付など幅広い技法を使い数多くの作品を生み出しました。特に白磁の壺や身近にある雪椿、蔬菜などを題材にした親しみやすい絵付の花瓶や湯呑みなどは高田を始めとする多くの人々に愛され使われてきました。また疎開してきた詩人の堀口大學、小田嶽夫、写真の濱谷浩との親交、会津八一や醜酔学の坂口謹一郎をはじめとする多

くの文化人との交流は上越・高田地方の文化振興に大きく貢献しました。

本展では、寄贈された全作品により齋藤三郎の陶芸の全体像を紹介し、また収蔵している県出身の工芸作家の作品を一堂に展示いたします。この機会に新潟の工芸に親しんでいただきたいと思ひます。

(学芸課長代理 宮崎俊英)



色絵椿文面取壺

# 全身で展覧会を体験するー身体表現と美術との出会いー

## 「ココロの形・カタチの心」ワークショップ『笑う門には福来たる!?!』より

子どもたちとともに美術館活動をしていると、子どもの頃には持っていて、大人になると忘れていく感性が、確かにあるのだと思うことがよくあります。それは、言葉や理屈を超えて身体中で感じる直感的なものです。

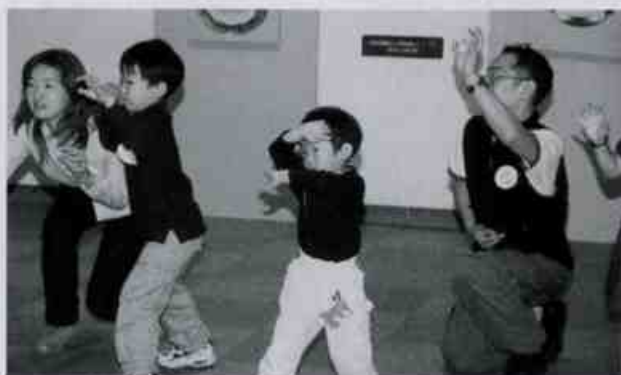
この春行われた企画展「ココロの形・カタチの心」は、子どもたちのそんな感性を大切にしたいという思いを込めて行われました。そして、それを強調して楽しむために行ったのが、ワークショップ『笑う門には福来たる!?!』。案内役は、プロの役者さんの松本麻希さんと柿ノ木タケヲさんです。

展示室に集合して、まずはストレッチ。そんな型破りなやり方で始まり、全身を使ったゲームで体と心をほぐしたら、作品の表情と関連させて全身で喜怒哀楽を表したり、手の彫刻からのポーズやセリフを考えたり…。美術の表現と演劇の身体表現を重ねることによって、視覚体験がよりリアルなものとなり、また作品の世界が立体

的に広がっていきます。目で見ると身体表現の交錯は、思った以上の相乗効果を生み出してくれました。

参加者は、作品に表れた形や表情とココロとの関係、あるいは、彫刻がもつ形に秘められた力などを、理屈を超えて身体いっぱいにしみ込ませることができたようです。

(主任学芸員 宮下東子)



### 表紙作品解説 斎藤義重《作品1》1957年

斎藤は1957年、第4回日本国際美術展でK氏賞を、また、同年の「今日の新人57年展」では《作品1》が新人賞を受賞し、「運咲きの新人」として一躍脚光を浴びることになりました。53歳でした。

《作品1》は戦後、一時沈黙していた斎藤が再び意欲的な取組みを始めた頃のものです。書の要素もある、再現性を捨てた抽象表現主義的な作品は活力に溢れ、そこ

には斎藤の充実振りを見て取ることができるでしょう。

その後、ヴェネツィア・ビエンナーレを始め、多くの国際美術展で次々と受賞を重ねていきます。

終始前衛的な姿勢を崩さず、現代美術を代表する一人として活躍してきた斎藤ですが、本年6月13日に97歳の生涯を閉じました。

### 美術鑑賞講座の変更について

年間スケジュールに記載の美術鑑賞講座の日程が下記のように変更になりましたのでお知らせいたします。

第5回 11月24日(土)：表現技法の背景—フロッターージュ

第6回 12月1日(土)：百花繚乱・大正期の日本画

### 美術館友の会からのお知らせ

新潟県立近代美術館友の会は、現在会員827人です。鑑賞会や研修旅行、会報発行などの活動を通じて、会員相互の親睦を深め、美術館の活動や運営に協力します。今年度前半には、「池田理代子原画による版画展」「友の会作品展」など友の会主催事業に会員の皆さんからご協力いただきました。

日本画の三人

大矢紀・三輪晃久・山崎隆夫 展

開場式のご案内

9月14日(金)午後2時～

※当日は受付で会員証をご提示ください。

作品解説会

9月26日(水)午後2時～

※企画展示室ロビーにお集まりください。

企画展無料観覧券をご利用ください。

### 利用案内

■開館時間／午前9時～午後5時

■休館日／毎週月曜日

※ただし月曜が祝日の場合は開館し、翌日休館(9/3(月)は開館し翌日も開館)および、9/10(月)～9/12(水)、12/25(火)～1/3(木)、3/25(月)～3/29(金)の各期間休館。

■観覧料金

・企画展観覧料

企画展によって観覧料が異なります。

なお、同観覧料で、常設展もご覧になれます。

・常設展観覧料

一般……410円(330円)

中等教育(後期)・高校・高等専門学校……200円(160円)

小学・中学・中等教育(前期)……100円(80円)

※( )内は20名以上の団体料金です。

THE NIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART

新潟県立近代美術館

新潟県長岡市宮前町字居掛278-14 〒940-2021

TEL.0258-28-4111(代) FAX.0258-28-4115

http://www.lalinet.gr.jp/kinbi/index.html

e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp

2001.9.1発行 4,000部

【問い合わせ先：友の会事務局 TEL.0258-28-4111】

# 美術雑筆

## 「ベゼクリクの誓願図」

新潟県立近代美術館長 水野 敬三郎

今夏のエルミタージュ展〈生きる喜び〉にベゼクリク石窟の壁画誓願図が出陳されました。縦240cm、横310cmの大画面を記憶されている方が多いと思います。そして日本の仏画と較べてどこか似ている、けれどどこか違うという印象を持たれたのではないのでしょうか。それはベゼクリクの地理的・歴史的環境を考えれば当然のことです。最近シルクロード見学ツアーのコースにも入っているため、ここを訪れた方もおられると思いますが、どんな所か簡単に説明しておきましょう。

ベゼクリク石窟は天山山脈からトルファン盆地に注ぐムルトク川の渓谷沿いに開かれた石窟（いま70窟）です。トルファンの一帯は天山山脈の南麓に沿ったシルクロード（西域北道）の要衝の一つで、これより更に西のカラシャール、クチャと共に仏教文化の栄えた土地でした。629年に長安を出発してインドに向かった玄奘三蔵は、当時この地に栄えた高昌国の国王麴文泰に歓迎され、高昌城に留まって一ヶ月間も仁王経を講じています。トルファン盆地の北側に火焰山と呼ばれる山並があります。その縦皺の入った赤い山肌と、低いところでは海面下154mというこの盆地の炎熱とがその名を生み、また『西遊記』の、孫悟空が奮闘し芭蕉扇で焰を吹き消して一行が無事越えるという火焰山のイメージを生みました。この火焰山の奥にあるのがベゼクリク石窟です。

高昌国を建てた麹氏も漢民族でしたが、玄奘が訪れて間もない640年には高昌国は唐軍に滅ぼされ、この地は唐帝国の支配下に入り唐文化の圧倒的な影響を受けます。しかし9世紀の末、モンゴルの地から西に移動してきたトルコ系のウイグル族が占拠し、統治します。ベゼクリクの石窟はおそらく7世紀ころから開かれ、誓願図はこのウイグルの時代になって盛んに描かれたものです。15世紀には、イスラム教が東進してトルファンの地もイスラム化しました。それ以来見捨てられていたこの仏教文化遺産が再び注目を浴びたのは、19世紀末から20世紀初めにかけて各国の探検隊が調査して以来です。1905年ルコックが第20窟の誓願図その他の壁画を切り取ってベルリンに送りました。ロシアのオルテンブルグ、イギリスのスタイン、日本の大谷探検隊も壁画を争って収集しています。このうちルコックの収集した第20窟の誓願図は第二次世界大戦の戦火によりすべて失われてしまい、『Chotscho』（火州）という大型の本に収録されたその13面の図版が残るだけです。誓願図はまだ現地にも残り、各国の美術館に断片はありますが、今回出陳の第15窟のものはもっとも保存状態の良い完全な一面で、まことに貴重な遺品といえます。

誓願図というのは、釈迦が前世で過去仏を供養し、出家、修行して成仏せんと誓願を發し、その仏から未来の成仏の予言（授記）を得るといふ話を主題にしたもの

で、そのことは第20窟の壁画の各面に記されたサンスクリットの銘文によって知られます。今回出陳の第15窟の図は、第20窟にある全く同じ図柄の一面の銘文から、釈迦が前世で最勝という婆羅門青年であった時に迦葉仏から授記を受けられる図とわかります。

このような誓願図の遺品はトルファンを中心に西域北道で散見します。ガンダーラにはその一つである燃燈仏授記の図が多数あり、多分ガンダーラの影響と思われる。中国でも長安の寺塔の壁画に描かれたという仏本行経變がこれに当たるようですが、その信仰内容としてはわれわれにはなじみの薄いものといえます。

しかし顔の表現などは日本の天平時代の仏菩薩、たとえば東大寺大仏蓮弁に刻まれた仏菩薩像に近いものですし、大腿部を盛り上げた量感のある体部の表現は、唐招提寺の木彫像や神護寺の薬師如来立像といった天平時代後半から平安時代初期にかけての彫刻を思い起こさせます。またここに詳しく述べる余裕はありませんが、文様彩色に見られる縹緗彩色は中国初唐時代に完成し、日本には天平時代に伝わり平安時代の仏画にも盛んに行われた彩色法です。はるか西のベゼクリク壁画と日本の仏教美術には、共に中国唐代仏教美術の流れを汲むものとして意外に近い表現が見られるのです。



火焰山とベゼクリク石窟



ベゼクリク石窟第15窟（グリェンヴェーデル第4窟）出土 9-10世紀  
壁画断片 240×310cm